

GREEN EARTH 緑の地球

1992・5

4

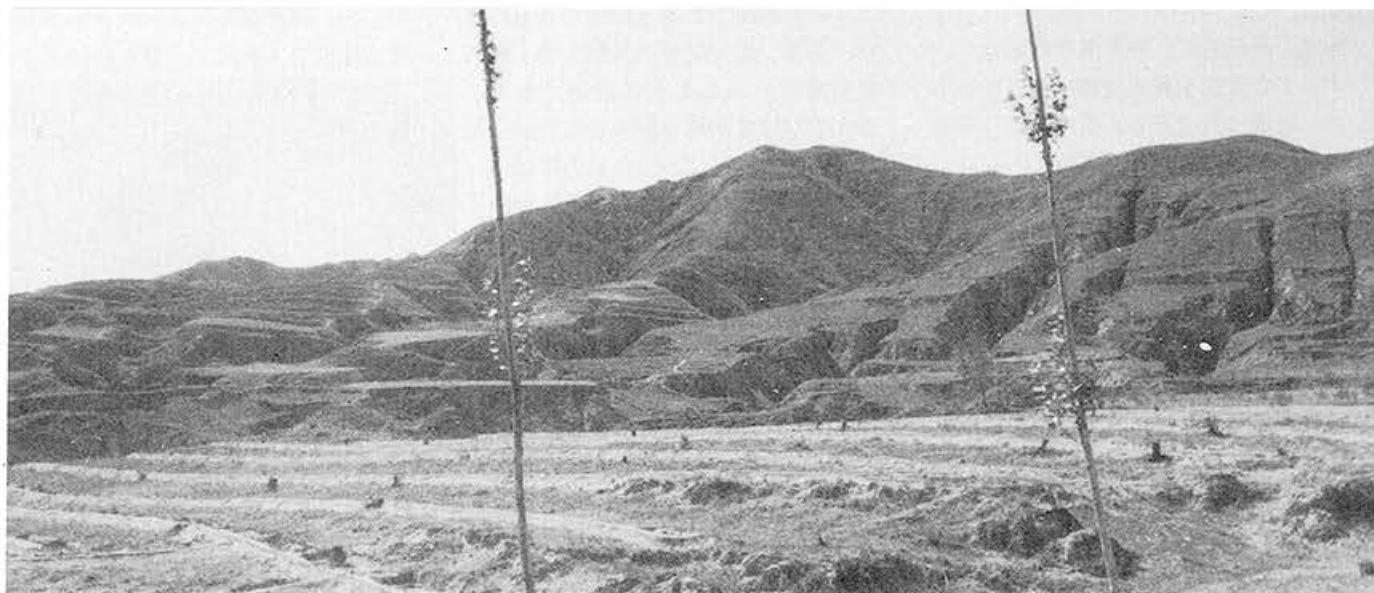
地球環境のための国境をこえた民衆の協力

COM21 通巻298号 発行/COM企画室

毎月1回 15日発行
定価/150円
年間購読料/2,000円
(送料共)

- 5月緑化協力団中間報告…………P1~2
- 物は小さく、関係は豊かに 中村尚司…………P3~6

編集／緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network
大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739(番552)
郵便振替 大阪 4-128465



畠の防護林として植えられたボプラの大苗(雁北地区大同県徐町郷)山肌をえぐる浸蝕は不気味だ

山西省での緑化協力を全アジアに広げよう!

緑の地球ネットワーク(準)

代表世話人 佐野茂樹

4月28日から5月2日まで、中国山西省を再訪した。主目的は同省雁北地区渾源県との緑化協力1月合意を具体化し、始動させること、また同地区数県にまたがる桑干河青年緑化プロジェクトの現地を考察し協力プランを成熟させることであった。更にこうした黄土高原の一点での歩みを確実に踏み出し、長江上中流域（雲南）、ガンガーハウス流域（ネパール）での緑の地球ネットワークの活動展望をうち出すことであった。目的は以下のように果たされた。

1) 渾源県での協力始動

1月派遣考察団が約した渾源県下緑化協力（資金面で表せば10万元）を以下のように定める。これは、県林業局長、恒山管理局長、県共青団書記、県長（同席、地区共青団書記、省青連秘書長）との協議で決定した。

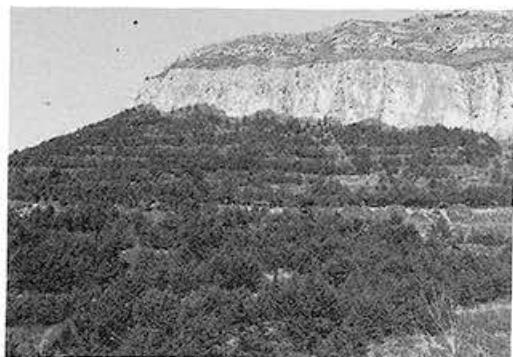
- ①同県西留郷での緑化に必要な各種苗木の育成のために50%（5万元）の資金カンパ。
- ②同県下北岳恒山の緑化に必要な各種苗木の育成のために40%（4万元）の資金カンパ
- ③10%を日本側の地区常駐者の協力活動のために日本側の予備として留保。（なお、この点は5月5日、6日の省青連との協議で省、地区、県レヴェルにわたって日本側に便宜をはかることを目的として、省青年連合会に委託することとした。）

以上の結論はシンプルで「平凡」なものであるが、これまでの考察と協議を十分に考慮したものである。

第一に、山西省はこの42年間で森林率を2.4%から17%以上に高めた緑化先進省であるが、ここの重点緑化地で

の成功は全華北に及ぼす影響大である。巨大な三北防護林を実現化する単位あたり全中国最大の緑化地は竜首山プランであり、西留郷はそのカナメの位置にある。1月考察団が寄付した1千本の杏を含め、この春に7千ムーの植樹を完了、秋には1万ムーに着手する（県全体で12万ムー）。荒れた土壤には、樹種バランスをよく考慮した良質の苗木育成が肝要である。また、協力の初步にあたっては、相互によく理解できる単純明解さと、結果を明瞭に確認できることが望ましい。（なお、苗木は水土保全のために油松、障子松、落葉松など。経済林として杏など。2,000年完成）

第二、恒山に関しても本質的に同様のことがいえる。高原にそびえるこの山塊は、水少なく、地形陥しく、土うすく、著しい困難がある（最大活着率



植林の成果は着々と山を緑にかえている

90%、最低40%、91年度平均45%）。すべての労働を義務植樹に負っているが、経費は大である。苗木もより強壯なものが求められる（大苗）。今回、北面の山すそから深山に分け入り山頂部まで探索したが、山腹の植林（主に松類）成功とともに、頂上付近に白樺が多く自生していることに大きな喜びを感じた。「時は今」であろう。かつて日本軍が焼き払った山の緑を、今私たちの協力で迅速に回復する意義は大きい。（なお、苗木は油松を主とし、落葉松、杜松、白樺、他にかん木やリラ、ヤマモモなどの花木類。）

1995年までに残された約3万8千ムーを緑化することになる。

第三、私たちG E Nは緑化に協力し、現地民衆との直接連帯を求める。それには考察が必要であり、直接の触れあいが必要であり、対話と相互理解

植林作業に参加した村民と話す佐野代表。
右は渾源県林業局長

が必要である。永続的に必要である。だが、一步一步計画を段階的に積み上げていく緑化協力、現時点の渾源県の場合、すでに成立している関係性に応じて、それにふさわしい出発の仕方があろう。様々な点から現地の植林欲求が強烈であり、現実に向けた県政府、郷幹部のイニシアティブが適切であり、村の人びとと幹部との関係が良好親密であると確認できるかぎり、当面、協力関係の基軸を県・郷の担当者に定めることが最適であろう。中学校に苗場を建設するといった具体的な細目にわたる協力構想にあえて固執しなかったのはそのためである。こうじたことは相互関係の深まりによって熟させうるであろう。苗木の育成はその一歩である。そして常駐の協力者の現地の日常性に触れる活動がそれを促進するであろう。これは緊急に実現させたい不可欠の要素である。

同様に、より大きな広がりをもった桑干河青年緑化プロジェクトに対し、考察と相互理解を先行させて、協力具体化にむけめ込みたい——これが、現地考察の結論である。

2) 桑干河青年緑化プロジェクト——現地考察と協力展望

渾源県に隣接する道地区的三県（応懷仁、大同）にまたがる桑干河緑化計画について、一月に地区共青団幹部から、きわめて的確な説明を受けていた。今回は代表的な現地を考察した。ここでは大同県徐町郷について記す。徐町郷は桑干河をせき止めた冊田ダムの南面に位置し、傾斜をもつて広大な黄土大地の背後に山々がそびえ立つ。一見して風沙のはげしいやせた土地であり、無樹の山々から桑干河に向けて深くうがたれた浸食谷が何本も走る。それでも植樹の成果

をあちこちに認めることができる。事実、黄沙の舞い上がりは相当に減ったとのこと。91、92年には1千ムーにわたって障子松を植え、杏の苗を育てている。5月にも100ムーのナツメ試植をする。この両年投資1.86万元。もちろん、中央政府投資はなし、ほとんどが地元の資金工面。さらに1995年までに毎年ナツメ150、杏300、針葉樹500ムー、計4,000ムーを完成させたいとのこと。森林がないことによる水土流失は深刻で、それは土壤を絶えず劣化



苗木の手入れをする村の女性

させ冊田ダムを土で埋めてしまう。もともと貧しいところで、今一人あたり年収は320元。植林は十分に生態効益と経済効益のバランスを考慮している。実際に今の生活向上と環境奪還との一体実現に命運がかかる。こうしたところでの緑化協力を私たちも切実に求めるものである。（新しい難問に気付かせられたことも、三県考察の「成果」であった。それは広汎に見られる塩害である。三県のみならず、大同市から太原にむかう鉄路沿いにもずっと続く。石炭排ガスによる酸性雨とは対照的なこの事柄に十分な調査と対処が必要であろう。）92年中に現地との交流を深めて協力計画をつくり出そう。

（なお、協議経過、三県考察はくわしくは別に記することにする。また、中国各地とアジアへの発展展望についても次号以下に。）

1992年5月13日

国境をこえた協力の第一歩が始まった！ 「中国緑化協力団」帰国報告会

- と き／5月29日(金)午後6時30分～
- ところ／大阪市立港区民センター
(環状線・地下鉄中央線「弁天町」徒歩5分)
- 参加費／500円

第2回自然と親しむ会

- と き／6月28日(日)午前9時45分集合
南海高野線・近鉄南大阪線「河内長野」駅前
- 目的地／河内長野市立林業総合センター
植林地の間伐問題を学習し、間伐材を用いた木工に挑戦します。(実習費約1000円)
- お問い合わせは緑の地球ネットワークまで

物は小さく、関係は豊かに

中 村 尚 司(龍谷大学教員)

環境問題のとりくみは生命系の根源から社会システムを創ることと一体です。以下は3月27日GEN(準)主催講演会における発言要旨です。

生命系のキーワード

「生命」とか「生命系」を考えるさいのキーワードとして、「循環性」「多様性」「関係性」の3つがあります。活動主体である生命は、その対象となる環境=自然が周囲にあってはじめて成立します。生命活動とは、環境からエネルギーや低エントロピーの物質をとりいれ、最終的にそれを廃熱や廃物のかたちで環境に排出することだ、という定義も可能なわけで、生命活動が永続するためには、循環の成立が最大のポイントになります。

「サステナブル・ディベロップメント」(永続可能な発展)とは、ノルウェーの首相ブルトランツさんが、国連特別委員会の報告書(1987年)で述べたもので、次世代、次々世代の生活を保障する経済のあり方を探求したものです。ローマクラブの報告「成長の限界」(1972年)は、経済の物質的な発展には限界があることを明らかにしました。ブルトランツさんはそれをふまえ、成長に限界があるとしたら、「南」の人たちやつぎの世代の人とともに生きることのできる経済を考えないといけないことを提起しました。ことし6月にブラジルで開かれる国際会議は、それを契機に計画されました。

きょうは「循環性」と「多様性」は簡単にすませて、「関係性」を中心に考えることにしますが、『中央公論』4月号で柴谷篤弘さんが循環性の問題を深める重要な提起をされています。サケがなぜ川をさかのぼるかということです。サケは200gぐらいまで川で成長して海に下り、そこでたくさんの栄養物をとって、4~5kgになると生まれた川にもどりますが、川ではほとんどなにも食べません。そしてシベリアの奥地あたりでクマやキツネなどに食べられ、土に返るんですが、その生涯をつうじて、海のなかの栄養物を地上の山野に運んでいますね。地球

の重力によって海の底に引き寄せられる硝酸塩や磷酸塩などの無機塩類を、高いところにもどしているんです。

樋田敦という私の友人は、鳥が地上の低いところのものを高いところに運んでいることの意味がたいせつだと、くりかえし発言してきました。あきあきするほどそれを聞きながら、サケが水のなかでやっていることの意味に私たちには気づかなかった。それを70歳をすぎた生物学者の柴谷さんが、生物界の循環と多様性のつなぎめとしてみごとに解きあかされた。ダーウィンの理論では、サケの行動の意味はまったく説明できないんだそうです。

いま地球の生物種を人為的に保存しようとする自然史博物館などの動きが国際的に流行です。日本はODAの一部をまわして、遺伝資源保存施設をアジアの各地につくっています。しかし大切なのは、いくつかの種の遺伝子を再生可能な状態にしておけばいいというものではなく、地球の生命系のなかに多様性と循環性が一体となって存在しないといけない、そのことをサケや鳥は身をもって示しているのです。

道具中心の哲学でいいか

きょうの本題の「関係性」にはいります。人間は生物種のなかでも特異な位置にあります。マンモスはずっと以前に滅亡しましたが、それを知っているのはゾウではなく、人間だけです。クジラが絶滅の危機にありますが、それを悲しんでいるのはイワシでもマグロでもなく、クジラの親戚のイルカでもなく、やはり人間だけです。人間だけが種の生成や滅亡を確認し、生物界全体の営みのなかに位置づける強みをもっているんです。

なぜこんなことが問題になるのでしょうか。生命系が最初にスタートしたときは、循環は定常的にスムーズにいたいました。ところがなにかの支障がでて、そこから生物は多様な



種に分かれていいく。しかし、それでも袋小路におちいるような事態があったのでしょうか。たとえばサーベルタイガーは牙が発達しすぎたために存続できなくなりました。個々の細胞の老化は世代交代でしのぐんですけど、それだけでは解決できない事態がでてきた。まえの世代の成果をつぎの世代にうけつぐ、ほかのやり方はないだろうか。そこででてきたのが火の使用だと思います。

火は地上いたるところにあります。年間10万~20万件の山火事があり、落雷も無数にあります。しかし火にふれると生体は破壊しますから、人間以外の動植物は火を利用することができない。人間だって、肉体で火をあつかうことはできず、なんらかの方法が必要です。ある種の社会関係を組織し、だれかが夜も火を維持するということに成功して、火をあつかえるようになったんです。そのために、かなり複雑な内容をたがいに理解できるよう、一定の文法構造をもった言語が成立していく。

みなさんのなかには、人間は木からおりたサルで、道具をつかうことで発達してきた、人間の特徴は労働手段をもつて世界を変えることだ、と考えているかたが多いと思います。歴史学者たちも、旧石器時代、新石器時代、鉄器時代……というように、道具によって時代を区分し、労働手段の発達が生産力の発展を生みだし、それが世界を変えると考えてきました。その根本にはヘーゲルやマルクスなどのドイツ哲学があったと思います。

しかし道具中心の考え方方がはじまつたのは18世紀以降です。人類には数百万年の歴史がありますが、それ以前にそういう考え方にはなかった。いま歴史の転換点で、そこらのことをもういちど考えなおさないといけない。

「ディベロップメント」

「ディベロップメント」（開発）を流行語にし、世界を「開発」で荒らしまわったのは、「アメリカ帝国主義の陰謀」ぐらいに私は思っていますが（笑い）、私をそそのかしたのはイヴァン・イリイチというおかしな哲学者です。アメリカのトルーマン大統領がポイント4という政策（1949年）で、開発こそ今後の世界政策の中心だとのべましたが、それ以降、世界は開発のとりこになってしまった。国際連盟時代の国際機関はILO（国際労働機構）、FAO（世界食糧機構）、WHO（世界保健機構）というように、「D」（開発）の一字がないのに、それ以降の国際機関はUNDP（国連開発計画局）、ADB（アジア開発銀行）、名古屋にあるUNCRD（国連地域開発センター）というふうに、とにかく「D」がつく。

アメリカは1935年にフィリピン憲法の草案をつくり、それが日本国憲法の下敷きになりましたが、そこには「開発」という言葉は4ヶ所だけだった。ところがフィリピン独立後の憲法には「ディベロップメント」がたいへんないフレです。

「ディベロップメント」は日本語ではおかしなことになってるんですよ。通商産業省は「開発」とはいわず、経済協力白書をよむとすべて「発展途上国」です。ところが外務省の開発援助白書では「開発途上国」で、「発展」とはいいません。経済企画庁の経済白書ではただの「途上国」なんですね。

「開発」と「発展」はおなじ意味ではないですね。男女関係の「発展」はあっても、男女関係の「開発」はないし（笑い）、宅地「開発」はあっても宅地「発展」はない。

じつに危ないことばなんんですけど、そのもとをずっとたどると、火の使用にいきつくんです。「ディベロップメント」の元凶はトルーマン大統領だと

いいましたけど、もっと以前にレーニンは「資本主義の発展」を強調しましたし、「世界史発展の基本法則」というように「発展」によって世界全体をつかもうとしたのはマルクス主義者たち、あるいはヘーゲル主義者でした。

それをいま、道具中心ではだめなんだ、労働手段の発展が社会を決めるというのはちがう、というところにもどすとしたら、それは「火」だろうと思います。人間が社会的な関係をむすぶ出発点となったのが火の使用ですし、それは人間の強みとなるとともに、他の生命活動に破壊的な作用をおよぼすまでに人間を変えてしまった。

元ソ連邦の原発をどうするかが問題になっていますが、火の破壊力を極限まで高めた結果なんですね。そしてそれを循環性、多様性のところへもどす方法がみつからない。そういう悲劇に直面しているんです。

しかし、破滅の未来しかないと、悲観的に考えるしかないと、そういうことではないと思います。いつの日か原子炉の後始末をしないといけないし、できるはずだと思うのです。

いずれにしろ火の使用がきっかけになって社会関係がうまれ、つぎの世代に文化をつなぐことが可能になってきました。

人間は自分の死を確認できない

しかも幸か不幸か人類は滅びなくなってしまった。人間だけが他の生物種の絶滅を確認できるといいましたが、同時に人間は自分の死を確認する方法をもちません。他人に確認されないかぎり自分の死はわからないんです。社会関係とはそういうものです。

それでは原水爆が大量につかわれ、地球が破壊しつくされたら人類は絶滅するかというと、それでも絶滅しない。だれか最後の一人が人間が滅んだことを確認しないかぎり、わからないんですね。もし宇宙のかなたで人間の絶滅を確認してくれる宇宙人がいたら、その宇宙人は人間とおなじ認識構造をひきうけることよって、避けようもなく人類の文化遺産を背負ってしまうんです。人間がそういう特異な存在になってしまっていることは、関係を考えるさいに重要なことです。

大学に就職したとき、私は学生の自殺にぶつかりました。自殺といつていいか、じつはわからないんですけど。その学生は農薬を飲んだんですが、胃の洗浄が成功して意識がもどったとき、周囲の人がこれほど心配してくれるのならこんなことするんじゃなかつた、生きたい、と決意した。ご両親もたいへんよろこばれた。ところが医者がいには、農薬は選択性で徐々に内臓をおかす、いまは元気なようだけどあと一週間が山だと。本人は生きたいと思っているのに、残念ながら死んでしまった。これが自殺かどうか、判断はむずかしいですね。私たちは生まれてくるときも関係のなかで生まれ、死ぬときも関係のなかで死んでいくしかないんです。

関係性として環境問題をとらえる

結局のところ、関係のなかでだけ私たちは生きていますから、社会のあり方を変えようと思えば、関係を変えることを通じる以外にないんです。日本の私たちは豊かにくらしているとか、第三世界は貧困だとかいわれ、なにか自分の外で解決可能なように考えていますけど、じつは関係を変える以外に解決の道はないんですね。

環境問題を考えるばあいも、環境汚染一般があるわけではありません。サケや鳥にとって、汚染があるかないかなんて、およそ意味がないんです。汚染というのは、人間にとてだけ、それも人間と人間との社会的な関係のなかでだけ意味があることなんです。

田んぼの泥をもってきて、結婚式場にぶちまけるとします。田んぼの泥はそのなかの微生物といっしょにイネを育てるんですね。だから田んぼの泥が汚れているとはだれも思わない。田植えをしているとき、もし泥のついていない人がいたら、田植えを怠けて汚いやつだということになる。ところが結婚式場にぶちまけられた泥は、物理的、化学的、生物学的にはまったくおなじなのに、やっぱり汚いということになる。汚染とかいっても、物そのものが汚いのではなく、人と人の関係のなかで成立することなんです。だから、汚染物質がここにある、その汚染物質をなくそう、というようなことで

は環境問題は解決できないんです。

貧しさ、豊かさといった問題も関係をぬきには考えられないんです。日本は世界一の黒字国だ、輸出過剰の国だと思いこんでいる人が多いんですが、神戸や大阪の港をみると、入ってくる船は満杯なのに、出していく船はほとんど空っぽです。海運統計でみても輸入9トンにたいして輸出1トンの割合です。輸出の9倍も輸入しているのが日本の貿易の特徴なんです。こんなことをやっているのは日本だけです。7つの海をたくさんの船が通っていますが、その3割がこのせまい日本列島にあつまり、どんどん荷物を降ろしているんです。ところが価格で考えるから、日本はもっと輸入しないといけないということになって、循環はさらに破壊されていく。

貧富の新しい指標

価格とはなにかというと、これも人間の社会関係なんです。サルやイヌに価格の概念はないし、また価格そのものに責任があるわけでもない。私たちは、自分たちがつくった特異な社会関係に自分たちをしばりつけ、サケにも劣る生き方をしているんです。

価格だけで評価するのはおかしい、豊かさや貧しさをG N Pだけで評価するのはおかしいというので、世界銀行は、1人あたり所得水準にかわるものとして、平均寿命や教育の普及度なんかを指標にしあげました。しかし人は長生きすればいいのでしょうか。人間はかならず死ぬし、死ないと世代交代ができませんから、死ぬこと自体が悪いんじゃない。教育だって公教育の普及が人間を豊かにしているかというと日本の現状をみてもそうはいえない。世界銀行の基準によると、世界のトップは日本んですけど、それだけみてもどうもこの指標はおかしい。

UN D P (国連開発計画) は、G N Pや寿命や教育だけでなく、人口あたりの犯罪数、医者の数、救急医療の状態など、もっとたくさんの基準をとりいれて、H D I (人間的発展指標) というのをつくりました。ところがこれによっても国連加盟 150か国のトップは日本です。

どうもなっとくできないので、私も

いくつかの指標を考えてみました。そのひとつが次世代の再生産率。日本では女性が生涯に産む子どもの数がある時期から2を切り、最近では1.57とか1.52になって、厚生省が心配しています。そこでフィリピンから花嫁をここ数年で3万人くらいつれてきたり、中国の農村地帯では捨てられる女の赤ちゃんを養子にむかえたらどうだとか、いろいろいわれる。つぎの世代の再生産は社会にとって大問題ですから、これはひとつの基準になると思います。

つぎに精神病院に隔離される患者の数。6か月以上収容される患者の数で日本は1975年にアメリカを追いぬき、その後もふえつづけています。アメリカはむしろ減っていますが、経済力の低下以外に、地域社会に包みこもうとするノーマライゼーションの考え方がつよくなつたからです。社会の豊かさを考えるうえで、ここには重要な問題が示唆されています。

バングラデシュと日本

バングラデシュの村で、借金を苦に自殺した人を知っているかと聞いたところ、だれも知りませんでした。日本の警察白書をみると、経済苦で自殺したり蒸発したりする人が何万人もいる。借金を返せなくともさして気にしなくていい社会にくらべ、自殺しないといけない社会が豊かだとはいえないと思うんです。

それから地域のなかで物質がちゃんと循環しているかどうか。日本は極端ですね。バナナの皮をミンダナオに返してやるとバナナの成育に役立つし、エビの頭や尻尾は食べないんだからジャカルタ湾に返せばエビの成長に役立つんです。それを琵琶湖や霞ヶ浦に捨てるこによって、循環からはずれてしまっている。そういうことを個々の地域について考えてみる。

心身障害者の社会参加率、ボランティアにとりくんでいる人の率。そういうことで比較すると、バングラデシュの村のほうが日本より高い。こういうことをていねいに調べて、国連加盟国をランクすると、日本は世界一貧しい国なんじゃないか。

物は小さく、関係は豊かに

生命系から社会を考えると、「循環

性」「多様性」「関係性」を尊重し深めることがもっとも重要ですが、そのための原則が「物は小さく、関係は豊かに」なんですね。より正確には「物の動きは小さく……」なんでしょうが。

私は経済学者ですから市場メカニズムの利点もいくらかわかっているつもりです。人間の労働によってつくりだせるものは、商品として売っていいと思うんです。たいせつなのは市場で売ってもいいものと売ってはいけないものの区別でしょう。人間の血液は働いても増やせないし、必要なだけが肉体に備わっているものです。そんなものをお金で売買するのは絶対におかしい。ところが世界の血液市場の3分の1を日本が輸入している。

コメは労働でつくれるものなのに、自民党から共産党まで声をそろえて輸入に反対しています。ところが血液の輸入にはほとんど反対の声がない。なんとかしてくれとWHOが厚生省に申し入れたのに、どうにもならなかつた。最近、頭打ちになったのは、エイズと血清肝炎の問題からです。

商品について

根本的には、土地所有、労働力、社会的信用といったものが商品になっているのはおかしいんです。土地に価格がつくなんてへんでしょ。土に値段がついているわけじゃないし、どこかに土を運んで売り買ひできるわけでもない。登記によって所有を確認し、社会関係で値段をつけているんですよ。そういうものを商品からはずしていくことは「物を小さく、関係は豊か」にする重要な手がかりなんです。

2番めの基準は、商品として売るために生産されたかどうかです。母親がつくった遠足の弁当に子どもが代金を払ったら、親子の関係が商品を介した関係に変わってしまいます。その母親がパートで弁当屋で働いているとしたら、そこでつくった弁当にはお金をもらわないと困りますね。売るためにつくったときはお金をもらうし、そうでないときはもらわない、これも必要な基準だと思います。

3番めは生命に危険がないかどうか。これはいうまでもないでしょう。

4番めに、交通と運輸のシステムです。輸送体系が幹から枝へしだいに細くなっているか、それともどこが重點かわからないほど網の目状に広がっているか、といったことがたいせつなんです。東京ー大阪間が幹線で、あとは枝ということになっていると、大阪から東京に3時間でいけるのに、京都と大阪の府境からここまで2時間半かかることになってしまう。私たちが自立できるためには、地域の力で行動システムの根本を変えることが重要なんですね。

地域住民の自主・自立

日本の現実がそうなっていない大きな原因に、土地の管理に住民がほとんど力をもっていないことがあります。土地を売買しようと思えば、法務省の出先の法務局にいって土地台帳で登記を調べ、それを取引の基準にする。本来なら地域の自治体のしごとで、こんなことを中央にまかせているのは日本ぐらいのものです。

逆に戸籍のようなものを自治体があつかっているんです。東京に住んでいたとき、子どもが生まれても戸籍に入れなかったら、私の本籍地である京都の上京区の区長から、はやく戸籍に入れないとキズがつきますよ、と速達の手紙がくる。いや、私は都民税や特別区民税ははらっているけど、京都市民税ははらっていません、区長さん、私に手紙をくれる時間があるなら、上京区民のためにサービスしてください、と返事を書いたんですが、それでも、戸籍に入れなさいと手紙がくる。

戸籍制度は国家が住民を管理するためのものですよ。それなのに自治体が後生大事にひきうけている。こんなにすぐれた管理の手法を、世界でやっているのは日本と日本の植民地であった韓国、台湾だけなんです。アメリカやイギリス、フランスなどでは自治体が反対するからやれない。日本は、地域で自立できていないために、交通システムも中央集中的になっているんですよ。

関係を中心に社会を考える

これから「関係」を中心に社会を考えようすれば、中心は地域にないといけないし、地域の住民が地域の問題

を自立的、自主的に解決するのが望ましいんです。そのためには、できるだけ物を動かさないで、人間が動いたほうがいい。人間は世界中動いてもいいと私は思います。バナナを食べたいのなら、ミンダナオにいって食べるのがおいしいにきまってるんです。青いうちにあって船底で熟させたものより、現地で熟したものがはるかにおいしい。どうしてもエビが食べたいのなら、中国にいって食べたらいいんです。

ところがいまの運賃体系では、ウシやマグロを飛行機で運んだほうが、人間が飛行機にのるよりも安いという、へんなことになっている。

車といえば、後始末の問題があります。トヨタは毎年ひとつの工場を世界各国につくっており、また車を売るために153の国に社員を派遣しているそうです。しかし後始末は消費者、自治体、解体業者がやることだというんですよ。京都府の大坂よりに八幡という解体業者の集中しているところがあります。ここは歴史のふるい被差別部落で、かつて牛馬の死体を処理させられた人が、いまは自動車の死体の処理をしています。しんどいしごとですし、最近はプラスチック部品がふえたため燃やすとダイオキシンができるし、エアコンからはフロンガスができる。廃油が土壤を汚染し、古タイヤはとっくに処理能力を越えています。

最近はそこに多くの外国人労働者があります。私が会っただけでも30以上の国籍があるのにびっくりしました。トヨタの社員はどこの国でも合法的に働くんだけど、その人たちは働く資格さえ与えられていないんです。つねにピクピクしながら働かないといけない。そういうことも私たち自動車をつかう人間の責任だと思うんですね。

本来なら後始末に要する費用、たとえば20万円を自動車価格に上乗せし、廃車資金として積立てて、それで処理すべきでしょう。あたりまえのことですね。あるいはトヨタが製造工場のとなりに廃車工場をつくれば、部品の再利用もできて、いちばんいいはずです。ところが厚生省が改正した廃棄物処理法はまったくのザル法だし、通産

省のリサイクル法も製造者が責任をのがれるための防波堤にすぎません。

そういうことがおこるのも、ものとの基準が価格にあったため、物の動きを大きくする方向へ一方向にすんだからなんです。そして日本の社会は「会社」を中心に一元的に組織されてきた。これからは会社だけにとらわれない、多重生活者の社会をめざさないといけないんですね。そのための重要なポイントが、人間と人間との豊かな関係をきずくことです。

労働者や経営者など金を稼ぐ人と、児童、老人、病人、障害者など金を稼がない人が等価でなければいけないし、家族のなかでのしごとの分担も変わっていく必要がある。

さらに地域社会で自立していくために、さまざまな相互扶助、ボランティア活動に参加していくことがだいじだと思います。社会的な生産活動をおこなう組織としても、株式会社一色の社会から、自主管理企業、あるいは協同組合といったものをふやしていく必要があると思います。

人の移動は大きくていいといいましたが、地域、国境、民族、時代を越えて生きる試みがいろいろなされたらいと思うんです。留学、研修、通婚、養子、巡礼、旅行、放浪など、商品の流通にとどまらない人ととの交流がふかまるることは、双方の社会を豊かにすると思うんです。

社会全体構造転換の途

いま求められている転換は、個々の制度の改善ではなく、人間のあり方、人間の社会、人間の歴史、そういうものを全体として見直す、そのような転換だと思います。しかもそれは、なにか大きなショックによって社会のしくみがいっきょに変わる、そのような転換ではないのではないか。古い社会と思われてきたことのなかに新しい、たいせつなことが再発見されたり、労働といえば伝統産業の職人の世界がそれなりに輝いてみえてきたり、いまくすんでみえるものが輝いてくる、あるいは私たちが気づいていないにかが輝いてくる、そういうふうにして社会が変わっていくのではないか、私はそのように考えています。

ひとことメッセージ

私にもできる！

萬金輝子（大阪外大1年）

近年、エコロジーや環境破壊の恐ろしさなどが取り上げられる機会が増えた。私も頭の中では「緑を、地球を守らなければ」という漠然とした意識は持っていたのだが、いったい何から手を付けて良いのか全くわからないまま、とりたてて行動をおこすこともなかった。

そんな時、新聞でこのネットワークの記事を読み、「これだ！」と思ったのだ。自分たちの手で、直接緑を増やしていく——なんて素晴らしいことなのだろう。

ちっぽけな一人の人間ができる事なんてたいしたことはないかもしれないが、やってみる価値は十分すぎるくらいだ。

「私にもできるかも」という喜びから入会させていただいたが、これからは植樹運動だけでなく、講演会などの催しにも積極的に参加して自分の視野を広げていきたいとも思っている。

「関心」から「行動」へ

森本泰正（立命館大4年）

今どきの学生はわりと環境に敏感です。私の大学でも新入生に対するアンケートで関心度No1ですし、この新歓期にはいくつか講演会・討論会が開かれ、多数の参加を集めました。私が参加した討論会では、地球環境と世界経済・南北問題との関わりを認識とともに、もっと身の周りの環境保護（例えば、ゴミの分別収集を徹底させる——地方出身者にとってはまさに「信じられない」状況があるようです）にも目を向けるべきだとその声が相次ぎました。しかし、問題なのは私も含めてこのような「関心」をなかなか「行動」にまで結びつけるにいたらぬい、ということです。どうも環境問題はイメージ先行の感があるようですが、この「関心」を無にすることなきよう、どんどん「行動」すべきだと考

えます。学生は勉学が本分ですが、その前に一市民、地球市民であることを忘れてはならないと思います。社会人だってそうだと思います。そこで提案ですが、GENで、（日高さんもおっしゃっていましたが）「私たち市民にもすぐできる環境のための行動カタログみたいなものをつくってみてはどうでしょうか。きっと「行動」へのカンフル剤になると思います。

今、何ができますか！

池田真比留（古本屋バイト）

自然気功の講習会で出会った人とのつながりから緑の地球ネットワークの会員になった池田真比留さんに夫婦別姓のパートナー関義友が、その動機についてちょっとインタビューしてみました。

——ポン！と会費を払おうと思った時の気持ちは？

池田 ふだん私は熱心に勉強してはいないけど、地球環境の状態が悪くなっていることはわかるじゃない。いまの私には中国へ行く力もないし……何かいまの自分にもできることをしたいなと思って、それで会費をはらったの。

——いまいちばん気がかりな環境破壊は？

池田 原子力発電所なんかの核と、水道水のまずいことかな。

「木を植える女」になろう

東川貴子（会社員）

不毛の土地を、半生かけて緑の森に変えた男——「木を植えた男」は、絵本やアニメーションで皆さんご存じのことだと思います。彼の死後45年、世界は加速度的に変化を遂げてきました。

森林破壊、水質汚染、大気汚染、南北格差、エネルギー問題、人口問題……、今や何をどうすれば問題が解決に向かうのかさえ見当もつかなくなってしまった世界を前に、個人の無力さに茫然と立ち尽くすばかりです。

そんな時、二度の世界大戦に見向きもせずに、ただ木を植え続けた彼の姿

勢は、あるいは見習うべきものかもしれません。羊や蜂の世話をする日々の暮らしのかたわら、毎晩どんぐりを選び分け、丁寧に植えていく。緑の森や、人びとの笑顔を夢見て、出来ることから始めてみる。

と、ということで、私もここに一步踏み出そうとしています。

訪中経験を生かして仲間作りを

落合智恵子（天の半分を支える会運営委員）

我人生の半分を中国とかかわり、その間、19回の訪中をするなかで、いつも思うのは都市の街路樹はりっぱだが山に木が少ない事である。中国政府が緑化運動を積極的に押し進めるようになったのは文化大革命以後からでまだその歴史は浅い。

昨年の五月、このネットワーク運動が始まっている事は知らず山西省を旅した。

大同～渾源を経て五台山に登り、太原へと、石窟と古代建築と仏像の歴史の旅を満喫したが、あの時、この運動を知っていたら、もっと別の見方で旅ができただろうと今、残念に思っている。

緑の地球ネットワークの一員になった今、

○中国の友人にこの運動を知らせ、中國側から運動実践を呼びかけたい。

○県下の日中友好運動団体への働きかけ

○訪中経験者への協力要請 e t c
一言でいうなら「仲間づくり」をやっていきたい。

第三世界民衆フォーラム 南北問題と環境問題を問う

●とき／5月24日(日)午後1時～5時

●ところ／部落解放センター

(環状線「芦原橋」徒歩5分)

■講演／松井やよりさん(アジアの女たちの会)

■パネルディスカッション

中村尚司さん(龍谷大学)、ジョアキンさん(在日ブラジル人)、小林致広さん(神戸大学)

■海外ゲスト

グラム・先住民主権回復運動、マレーシア・ペラ反放射能委員会、フィリピン・バヤン

●カンパ／1000円

*主催／第三世界民衆フォーラム実行委員会
(連絡先)中北法律事務所 ☎06-364-0123

成田公園「三ツ池」の自然環境保全について

鳥居川元子(三ツ池の自然を考える会)



三ツ池の清掃も活動の一つ。

三ツ池を含む成田公園は、寝屋川市美井元町と境橋町の住宅街に位置し、1984年度から整備を始めており、現在、池に対して1990年度から96年度に向け親水公園として工事が進められています。

三ツ池は南北およそ120m、東西およそ600mの小さな池ですが、(今まで二回埋め立てられ住宅になっています)約20種類の野鳥や80種類以上の植物、タヌキまでが生息していて、寝屋川市で残されている数少ない自然豊かな池です。

市の構想は、池底を凝固剤で固め(今年9月に工事予定)、池の三分の二を埋め立て、遊歩道を全周巡らすという「施設中心の公園計画」でしたので、自然を活かした公園に見直して頂くよう、工事の当初から要望書を提出するなどして、市に働きかけてきました。1991年には「三ツ池の自然を考える会」のグループを結成して、観察会、ごみ拾いを行ったり、また、ここ一年が山場ということもあり、今は署名運動、市長交渉にも力を入れています。

土佐の初夏の味“やまもも”

高知県甲の浦の田中隆一さんから、今回は黒潮の流れに沿って自生する無農薬のやまももです。

価格 1kg入り・2500円

送料 関西 620円・関東 820円

期間は6月中旬~7月初旬まで

TEL.08872-9-2260

FAX.08872-9-2500

地域住民はもとより、特に自然を愛する方々にも呼びかけていこうと大阪自然環境保全協会、北河内自然愛好会、野鳥の会の方々にもご協力いただいております。今回、大阪自然環境保全協会の重松先生(大阪府大農学部造園学科)にご紹介頂いた「緑の地

あこがれの中国の風に ふかれて

磯川佳子(設計事務所勤務)

学生の頃から行きたかった中国大陆。昨年7月、大陸の風を感じたくて、大地が生みだすエネルギーをずっと感じたくて中国へと旅たちました。飛行機でたったの3時間、日本とほんのちょっとした距離で、歴史、文化、生活、異次元の世界、でも、私の体がなんと自然に、のびやかになってしまい、不思議なくらいここち良い思いになれるのです。大陸の風は本当に私の心をやさしくつんでくれました。

91.7.15 北京に入り、市内観光。故宮と天安門。本当にあの天安門事件があった場所とは思われないほど、市民の人たちの楽しそうな笑顔。中国人女性の表現力がストレートで、すごくしっかりしていて、男性がどちらかといふと、やさしいのかなと思ったり、中国人はパワフルで表情が豊かだなと感じた天安門広場でした。

その夜、日本の家に電話をしたら「佳子だいじょうぶか」との一言、「なんで」と言うと「中国すごい洪水がおきてるで」とのこと、中国のTVにスイッチを入れると、本当にびっくりするような洪水で「ヒエー」「すごいなあ」「だいじょうぶかな」という思いで、洪水の場所は揚子江流域で私の旅行先とはちがうかったので、私たちのツアーは問題ありませんでした。

球ネットワーク」の会員の方にも「三ツ池の自然」を知っていただき、ご支援いただけたら幸いです。ご意見などありましたら是非ご連絡下さい。また署名もご協力下さいますようよろしくお願ひいたします。(なお、5月24日が締め切り日になっておりますが第二次として引き続き行います。)

(連絡先) 寝屋川市東香里園町7-5

TEL.0720-33-6432



青海湖(チンハイフ)へいく途中でした。あの時の洪水の流域に、一年たった今、「緑の地球ネットワーク」のボランティアの方たちが植林に行くと聞いた時は、また、びっくりしました。

翌日は、北京から蘭州まで飛行機で1時間30分ぐらいで、これまたびっくり、北京上空をしばらく飛ぶと、ある一線を境に、緑がないのです。まさに、黄土の世界一色で土だけの世界で、山も土色で、中国は緑豊かな国だと思っていたのですが、本当にしんじられへんような、今まで見たこのない風景で、その風景は自然に造られたものかなと思っていたのですが、今回、皆さんの話を聞くとちがう、人的なもので、本来緑のあるべきところに緑がないとのこと、一年たってぶり返ると私が昨年見てきた中国はなんとこれから私の生き方に意味を持たせてくれたなと思うばかりです。本当に良かつた中国。

編集後記 入会早々、会報の作成を手伝わせていただきました。しっかり読んでくださいね。編集に参加してみよう!という方、お気軽にお問い合わせください。 東川貴子